

新しい年を迎えて

新年明けましておめでとうございます。職員の皆さんも平成 30 年を新しい気持ちで迎えられたことと思います。毎年発表される平成 29 年今年の漢字は「北」でしたが、北の字源は向き合わずに背中を合わせる様子から離れていくという意味もあるようです。北が選ばれた理由は不安な世界情勢を表しているのかも知れませんが、昨年の高知病院はむしろ職員がお互い向かい合い力を一つにして直面する課題を解決してきたように思います。その一つが第 71 回国立病院総合医学会の四国高松での開催ではないでしょうか。国立病院総合医学会は平成 29 年 11 月 10 日（金）、11 日（土）の 2 日間、香川県高松市のサンポートホール高松、JR ホテルクレメント高松、レクザムホール、香川県立ミュージアムを会場に開催されました。学会のテーマは「道—明日へ—国立医療の未来を拓く」で、会長施設は四国こどもとおとなの医療センターで高知病院は副会長施設として学会運営に参加しました。オープニングリマークスでは楠岡理事長から機構が独立行政法人化して初めての赤字となり厳しい現状にあることが話されました。特別講演 1 ではカルフォルニア大学教授の中村修二先生から「LED 開発までの苦労—日本とアメリカの違い—」のタイトルで徳島大学を卒業し地方の研究環境の整っていない企業で実績を積み重ね世界との競争に勝った過程やその理由、研究に対するアメリカと日本の違いなど非常に興味ある講演でした。特別講演 2 はリオパラリンピック、ウィルチェアーラグビー銅メダリストの池透暢選手の「走り続けたから掴めた」とのタイトルで、交通事故により瀕死の重症を負い苦痛に耐えながら治療を受け大きな障害を残しながらも復帰し、このスポーツに出会うまでの過程、また銅メダル獲得までの軌跡についての感動的な話でした。学会は第 72 回国立病院総合医学会の担当である京都医療センター小西郁生院長（会長施設）、宮野前健院長（副会長施設）に応援旗が手渡され閉会となりました。参加者は 6335 名で 2452 の一般演題の応募があり学会が大成功のうちを終えることができたのも高知病院のスタッフの皆さんが打ち合わせや、会場の下見、現場でのシミュレーションなど学会運営に真剣に取り組み、起こりうる問題を想定し全て事前に解決していたことによると思いますし、これが、高知病院の持つ他の病院に負けない団結力とっております。また、院長協議会の懇親会では祭屋よさこい踊り子隊のメンバーと一緒に職員の方が本場のよさこい踊りを披露し参加者を楽しませてくれたこともこの場を借りて報告させていただきます。

平成 30 年は診療報酬と介護報酬の同時改定の年にあたり病院運営は厳しい状況に直面することと思いますが、少子高齢化、人口減少、医療費の増加など避けることができない我が国の現状を考えれば受け入れざるを得ません。国立病院総合医学会のテーマ「道—明日へ—」は国立病院機構にとっての道でもありますし、高知病院の未来に続く道とも言えます。先人から引き継いだ高知病院を未来に大きく発展させていくことは現在働いている職員に課せられた使命です。高知病院の職員は開院以来病院に課せられた国時代の大きな負債を背負って力を一つにして乗り切ってきました。この開院以来培われた団結力で激動の平成 30 年は職員一丸となり輝ける未来への道を切り開いて行きましょう。